

福山 聖子

どこにでもあるような町の洋食屋だった。外観も内装もただひとつ看板を除いて、情報誌に載るような流行りのレトロな店ではない。それでも店内をふわふわと漂う懐かしさが好きで、折にふれ訪ねた。

値段もひと昔まえの安さだったが、それにもましてメニューの多さが魅力だった。テールシチュ、タンシチュ、チキンコキールといったメニューに、正統派の「洋食」屋の歴史を守り続けてきた気概を感じた。

久しぶりに訪ねたら、その洋食屋が工事中の騒音を小路に響かせていた。近所の人に訊けば、来月に新装開店するらしい。店が無くなったわけじゃないのに、素直に安堵できないのは何故だろう。ポケットにしまい込んでいた宝物を落としてしまい、もう二度と見つからない時に似た悔恨が、全身をぎくしゃくさせる。どうか以前のイメージが消えていまいせんように。

洋食屋のある本町界隈を残して、八日市駅前はずっかり新しい街になった。初めて八日市を訪れたのは七年前。私を知っているのは変貌する過渡期の町の姿だ。八日市の駅舎が建て替わってゆくのもこの目で見てきた。訪れるたびに大きな街に再築されてゆくのが、傍観者の私にはマジックを見ているようだった。住人の違和感も日常生活の中で習慣となり、自分でも気づかないうちに新しい風景に馴染んでゆくんだらう。

きれいな新しい街はスマートで、絡みつくものがない。現代人にとって、そういうドライさがおしゃれで心地いい。

それに比べ、昔のままの町は湿潤で、濃密な空気が流れている。

本町商店街から路地に入りこむ。車が進入できない小路に、小さなスナックが並ぶ。寝ぼけ眼の「新地歌楽街」の電光看板が、まるで昔見た映画の大道具のよう。昼日中の、どこか間のぬけたようなワイザツさに惹かれてしまう。

また別の通りには、遊郭だったという格子窓の家並みが残る。廊や格子の深い陰翳が、哀しいまでに美しい。



通りを覆うように建て込んだ家並みの中に、ポカリと空間があった。家を解体して間もないのだろうか。セメントなどのガレキの山の向こうに、土蔵が現われた。こんな狭いところにも蔵があったなんて。隠してあった秘密をのぞき見たように、蔵壁の清々しい白さにドキリとさせられる。

その土蔵の奥には、本町商店街の切妻屋根がたなびくように並んでいる。アーケードの下からは屋根を見ることはできないし、第一、屋根を意識することなんてなかった。鈍色の瓦がリズムカルに連なる様は例えようもなく美しい。

迷路を歩きつ戻りつ、再び商店街へ。

この辺りに山崎富栄の実家があった。太宰治が最後に愛した女性で、玉川上水で共に命を散らした女性だ。彼女の日記には、純粋にひとを愛した女性の心の声を書き綴られている。昭和の香りがいまでも残る通りを歩きながら、富栄や太宰に思いを馳せるのもたのしい。

新しいものも、またそこから歴史が築かれてゆくけれど、一度消えてしまったものは二度と再現できない。それが分かっているから、失われずに残っているもの——それが空気のようなものでも、いとおしく思う。



ふくやま・しょうこ  
経産美術短期大学洋画科卒業  
朝日新聞「ふれあいネットワ  
ーク」挿絵執筆中